

安本美典の日本語の成立論

『日本語の誕生』（安本美典・本多正久著 大修館書店 1978年）から安本美典氏の日本語成立論を紹介する。

〔1〕安本美典氏の方法

安本美典氏の方法は、言語の近親性を統計的手法によって測ろうとするものである。それはいわば「語頭音検討法」とでもよぶべきもので、二つの言語で同一の意味をもつ単語の語頭にくる音が一致ないし近似していれば「両者は類縁関係にある」と考える。偶然によって語頭音が一致することが起こる可能性を計算し、事実がそれをどれだけ超えているかということを確認的に計算する。

実際には、スワディシュの基礎語彙（100語・200語）を基にする。各国語ごとに基礎語一覧表を作り、それぞれの単語の頭にくる子音（母音で始まる単語の場合は第一子音）がどれだけ一致するかを調べる。ただし、f・h・p・b・Vなどの音は互いに転脱し易いし、t・d・s・zなども相互に移り変わるのでそれぞれ一まとめにして同音として扱う。また、k・g・qなども一グループと見做し、rとlとは区別しないことにしてある。

子音の種類が仮に五種だけであるとすれば、100語のうち20語くらいは二つの国語の間で一致しても不思議はない。しかし、それが半数近くにも及べば「も早この二国語はその昔は同じ祖先から分かれて出来たものであろう」と考えられる。語頭子音の一致の割合が偶然によっては生じない確率を問題とするわけである。

〔2〕上古日本語と諸言語の数理的比較

（1）日本語・朝鮮語・アイヌ語

上古日本語・首里方言・中期朝鮮語・アイヌ語幌別方言との間を「シフト検定法」によって比較したデータが次の（表1）である。

	粗点(一致数)		一致が偶然によってえられる確率	
	基礎100語	基礎200語	基礎100語	基礎200語
上古日本語と中期朝鮮語	27	53	0.006282	0.000663
上古日本語とアイヌ語幌別方言	22	41	0.095405	0.195222
中期朝鮮語とアイヌ語幌別方言	32	57	0.000015	0.000033
上古日本語と首里方言	64	121	0.000000	0.000000

（表1）「日本語の誕生」p72.

次のようなことが分かる。

- ①「上代日本語と日本語の首里（沖縄）方言」とはかなり近い関係にある。
- ②「上代日本語」と「中期朝鮮語」、「中期朝鮮語」と「アイヌ語幌別方言」との間には、偶然とはいえ一致が認められる。ただし、同系であるとしても分裂から6、7千年はたっていると考えられる。
- ③「上古日本語」と「アイヌ語幌別方言」との間の一致は、偶然でもおきうる程度のものである。
- ④「上古日本語」「中期朝鮮語」「アイヌ語幌別方言」の3つの、「シフト検定法」による比較では、「中期朝鮮語」と「アイヌ語幌別方言」との一致がもっとも大きく、「上古日本語」と「中期朝鮮語」との一致がそれに次ぎ、「上古日本語」と「アイヌ語幌別方言」との一致がもっとも小さかった。

（2）日本語と諸言語

基礎200語、基礎100語において、偶然以上の一致がみとめられたのは、（表2）のような言語である。（表2）は、一致が偶然によってえられる確率の小さい順にならべた。この表から次のようなことがわかる。

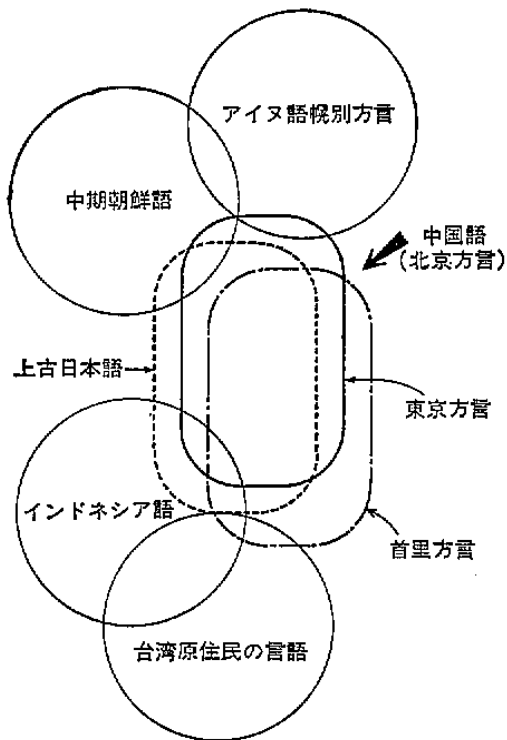
- ①この表の中に、いわゆるウラル諸言語、アルタイ諸言語に属するものは、わずか一言語しかふくまれていない（基礎100語、5%水準でモンゴル語）。語順などの、文法的な近似にもかかわらず、ウラル諸言語、アルタイ諸言語は、語彙的には、上古日本語と遠い。そして、全体的にみて、語彙的には南方的な言語との親近性が強いと判断される。
- ②インドネシア語、カンボジア語などば、基礎200語においても、基礎100語においても、中期朝鮮語よりも、強い一致度を示す。

(表2) 「上古日本語」と有意の一致が見られるもの (「日本語の誕生」 p.176-177)
 (基礎100語) (基礎200語)

言語	一致が偶然によってえられる確率	一致数	註
東京方言	0.000000	79	一致が偶然によって得られる確率は、ほぼゼロである。(0.0001%水準で有意。)
首里方言	0.000000	64	
中国語北京方言	0.000096	28	0.01%水準で有意。
カンボジア語	0.001612	29	0.5%水準で有意。
インドネシア語	0.002810	28	
アミ語	0.004705	27	
バイワン語	0.005261	28	ふつうの統計学の基準では、1%水準で有意である。
タヒチ語	0.006248	21	
中期朝鮮語	0.006282	27	
モン語	0.009879	29	
ベトナム語	0.012976	24	ふつうの統計学の基準では、5%水準で有意である。
ネパール語	0.015191	26	
ロロ語	0.019637	25	
ビルマ語	0.025623	22	
モンゴル語(現代語)	0.032778	23	
シンハリーズ語	0.048283	24	
中国語蘇州方言	0.049918	25	

言語	一致が偶然によってえられる確率	一致数	註
東京方言	0.000000	157	一致が偶然によって得られる確率は、ほぼゼロである。(0.0001%水準で有意。)
首里方言	0.000000	121	
インドネシア語	0.000145	57	0.05%水準で有意。
カンボジア語	0.000544	57	0.1%水準で有意。
中期朝鮮語	0.000663	53	
ロロ語	0.005649	53	ふつうの統計学の基準では、1%水準で有意である。
中国語北京方言	0.008965	50	
ネパール語	0.010315	51	ふつうの統計学の基準では、5%水準で有意である。
ベトナム語	0.010467	53	
モン語	0.024295	52	
シンハリーズ語	0.031032	47	
ベンガーリー語	0.037077	49	
ビルマ語	0.047021	45	
タヒチ語	0.048605	37	

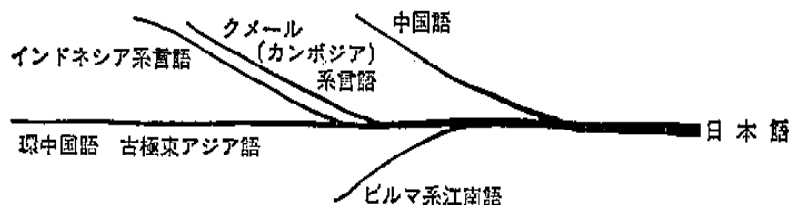
上古日本語、東京方言、首里方言、中期朝鮮語、アイヌ語幌別方言、インドネシア語、台湾原住民の言語、北京方言の八つをとりあげ、基礎200語の場合の語彙の重なり具合を図示すれば、次の(図3)のようになる。
 (「日本語の誕生」 p.185)



[3] 日本語の起源

上記の統計データを解釈して、安本は日本語は次のような四種の系統の言語が合わさってできたものと推論する。従来は、言語の成立については、一つの祖語から多くの言語が分岐する「系統論モデル」が考えられてきたが、日本語を考えるにあたっては、多くの川が注ぎ込んで大河となるような「成立論のモデル」が適当であるとして、下図のようなモデルを示している。

流入した言語の系統	流入の時期	主として寄与した領域
I. 古極東アジア語系の言語 (日本語祖語、朝鮮語祖語、アイヌ語祖語の共通基語のひとつとして古極東アジア語を考える)	6千年～7千年以上前	文法的、音韻的特徴(語順、rとlの区別がない、二音節語が普通、など)。若干の基礎語彙。
II. インドネシア系、クメール系の言語	5千年～6千年以前の頃から、西暦紀元前数世紀。弥生時代のはじめごろまで。	基礎語彙
III. 中国江南地方からのビルマ系言語	西暦紀元前4百年～2百年頃から数世紀。ほぼ弥生時代。	身体語、数詞、代名詞、植物関係の語。
IV. 中国語 (北京方言の言語)	西暦紀元以後。	多くの文化語。



(表1)「日本語の誕生」 p208

I. 古極東アジア語

環中国語の一部をなし、中国の東北方の、朝鮮語の語順などに関係のある言語層こそ、日本語のもっとも古い層である。それが基盤となり、その上に、いくつかの南方的な要素がかぶさって日本語が成立した。そう考えられるのは次のような理由による。

(1)「朝鮮語」と「アイヌ語」とが、「朝鮮語」と「日本語」以上の、はっきりとした偶然以上の一致を示している。これは朝鮮語祖語、日本語祖語、アイヌ語祖語を結びような環中国語が基層をなしており、日本語祖語が後に南方語の影響を受けて、変質をとげたと考えるならば、うまく説明できる。これに対して、南方的な言語が基層にあり、朝鮮語祖語的なものがかぶさったとする南方語基層説では、朝鮮語とアイヌ語との有意な一致がうまく説明できない。

(2) 基礎語彙においては、「日本語」と「朝鮮語」との一致の度合よりも、「日本語」と「インドネシア語」との一致の度合の方が大きい。これは「日本語」と「朝鮮語」との関係がより古く、「日本語」と「インドネシア語」との関係が、より新しいことを思わせる。

「日本語」「朝鮮語」「アイヌ語」は、環中国語のうちでもある程度のまとまりを見せるので、いま「古極東アジア語」という言語を想定する。これは次のような共通性を持つ。

- r と l の区別がない。
 - 清音と濁音の区別があまり明確でない。
 - 二重母音をさける傾向がある。
 - 語の平均の長さはほぼ二音節である。
 - 日本語の「てにをは」にあたるものを持つ。
 - 母音調和の現象があったらしい。(アイヌ語の母音調和については知里真志保氏の研究がある)
- 古極東アジア語は、アルタイ諸言語から、きわめて古く分離したものらしく、アルタイ諸言語との間にはかなりなみぞがある。

II. インドネシア、クメール系の言語

6、7千年程度前から、第二の波として、南方、とくにインドネシア、カンボジアの方面から、日本列島によせてくる。

①マライ・インドネシア諸語において、インドネシア語派とポリネシア語派は、いまから5～7千年前に分裂した。この分裂の後、インドネシア語派の言語は、サンスクリットの影響を受けた。例えば、「name (名前)」は、サンスクリット語「nam ā n」、インドネシア語「nama」で、日本語の「na(名)」は、インドネシア語を通じてサンスクリットを受け入れた形をしている。ポリネシア語とは似ておらず、日本語が、インドネシア語などの波を被ったのは、インドネシア語族とポリネシア語派とが分裂して以後と考えられる。

②「基礎百語」「基礎二百語」でみると、「インドネシア語」と「日本語」は、「インドネシア語」と「ポリネシア諸語」よりも近いほどであり、「日本語」と「朝鮮語」とよりも近いほどである。とりあげた諸言語のうち日本語に最も近いのはインドネシア語であった。日本語とインドネシア語との接触時期が近かったことを思わせる。

III. 中国江南地方からのビルマ系言語

西暦紀元前2、3世紀ごろまでは、おそらく、日本列島は、言語的に統一されていなかった。古極東アジア語の系統をひく言語や、インドネシア語の系統をひく言語をもちいる集団が、部族的に、各地に分布していた。西暦紀元前2、3世紀前後、弥生時代のはじまる前後に、おそらくは、稲作などとともに、第三の波として、おもに、中国の江南地方から、ビルマ系の言語が日本に押し寄せてくる。中国大陸で秦漢帝国による政治的統一がすすみ、漢民族が南下し、その圧迫により、中国南部の民族に、大きな移動がおこり、その結果として、江南から日本や朝鮮に、稲をたずさえてわたってきた種族がいたと考えられる。

これが、北九州に上陸して、すでに北九州に存在していた朝鮮祖語との関連をたもっていた古極東アジア語の系統をひく言語と結びつき、日本語祖語を形成した。

「ビルマ系諸言語」のなかの「ポド語群」の身体語では、日本語、あるいは琉球語と12語のうち、5～9語までも語頭の音が一致する。ビルマ系諸言語の中には、身体語ばかりでなく、数詞や代名詞、植物関係の語などにおいても、「日本語」と偶然以上の一致を示すものがある。ただし、それ以外の基礎語彙の一致はそれほどでもない。

また、「やま」「かわ」「とり」など、ふつうの日本語の基礎語彙は、二音節の語が多い。ところが、「め(目)」「は(歯)」「て(手)」「け(毛)」など、身体語には一音節のものが多い。一音節からなる言語は、中国語、ビルマ語、タイ語、ベトナム語、チベット語など、大陸にひろがっている。「め(芽)」「ね(根)」「は(葉)」「ほ(穂)」など、やはり一音節語が多い植物関係の語や、身体語、数詞、代名詞などは、どうやら中国地方の一音節語の地域からもたらされたものようである。これらの語は、「やま」「かわ」「とり」などのふつうの日本語の基礎語彙の上に、油が水に浮くように浮かんでおり、日本語の中に十分とけ込んでいない。これはビルマ系の言語が日本列島にわたってきた時期は、それほど古くないことを示している。